

講師 延塚知道先生

はじめに

こんにちは、えらく多いですね。たくさんの方にお出ましいたいただきまして、それぞれ皆さん忙しい色々なご用事があつたでしょうが、親鸞聖人の教えを学びたいという皆さん方のお心に、心から敬意を表します。特にこういう会座を開いてくださった田畑先生には、大変尊敬の念を持っております。

最近、ちよつと執筆中でありまして、体も少し弱っております、気分がどうもあまり上向きではないのですが、これだけたくさんおられたら、頑張らなくてはいけないと思つています。前回から『教行信証』を読み始めようということが始まりましたが、前回は、浄土真宗という親鸞の仏教、『教行信証』あるいは『大経』、そういうもののつとつて、「浄土真宗という仏教はどういう仏教であるか」ということを、皆さん方に分かりやすくお話ししようと思つて、お話をさせていただきますました。そういう意味では先回は法話です。そういうことで少しづつ勉強することになれていただきたいと思います。

『教行信証』制作の理由

今日は、親鸞聖人の『教行信証』がなぜ書かれねばならなかつたか。ご存知のように親鸞聖人の師匠は法然上人です。法然上人という方は、日本の仏教史上でも非常に素晴らしい仏教者です。日本の仏教者の中で群を抜いて歴史の中に残っているのは恵心僧都(この人は素晴らしい仏者でした)と、それから法然上人です。この方も素晴らしい学者で、仏教について知らないことは何もないというよ

うな学者でした。その法然上人は、インド以来の大乗仏教の中で浄土教というものを、世界でというか、日本で独立させるといふ事に命を懸けました。これは日本で浄土教を独立させたというよりも、大乗の二千五百年の歴史の中で浄土教を独立させたというのは法然が初めてですから、そういう意味では、大乗の歴史の中では画期的なお仕事をなさつた仏者でした。

ご存知のように法然の著書は『選択本願念仏集』です。これが正式な名前です。普通『選択集』と言われます。浄土教の、ある意味のエッセンスを『選択集』としてまとめあげておられるのです。ですから親鸞聖人は弟子として、「法然上人の念仏の教え以外に自分は広めたことはない、親鸞は珍しき法をも広めず、「法然上人のおっしゃつたことを伝えただけだ」と言つておられるのです。それならば『選択本願念仏集』があればそれでいいわけです。なぜ弟子の親鸞が『教行信証』を書かなければならなかつたのか、これは大問題です。

これから東西両本願寺をはじめ真宗十派は、少し後に立教開宗の御遠忌が始まります。立教開宗というのは、浄土真宗を親鸞聖人がうちたてたのだ、開いたのだというお祭りです。なぜ親鸞聖人が浄土真宗というものを開かなければならなかつたのか、どうして『教行信証』を書かなければならなかつたのか、そういうことがよくわからないと立教開宗の意義がよくわからないことになります。

今、皆さんのお手元にはないと思ひますが、東本願寺には「真宗」という名前の機関誌があります。その機関誌の中に立教開宗の意味を、偉い先生方がいろいろ議論をしておられます。その中で「要するに親鸞聖人は浄土真宗という仏教を別に開く気はなかつた」というようなことを堂々と先生たちもいらつしやいます。それなら『教行信証』は何のために書かれたか。『教行信証』は公に『大経』の歴史の中に公開した仏教書です。そこに親鸞聖人の立教開宗、ある

いは親鸞聖人の独特の、どうしても書かければならなかった必然性があるのです。それが『教行信証』の一番の要になっています。そのことを判っていたため、今日から少しづつ法然上人のお話をしようと思つてまいりました。

先ほど申しましたように、あれほど素晴らしい法然上人がいるのに、『選択集』という書物があるのに、なぜ『教行信証』を書かなければならなかったのか。そこには必然的な理由があるのです。親鸞聖人が命を懸けた理由がある。それを『教行信証』を学ぶ前に少しづつお分かりいただきたいと思ひます。

#### 法然上人との出会い

法然上人は親鸞聖人と年が四十歳違います。みなさん「四十歳違う」というのを想像してみてください。上の人はほとんどもういないでしょう。下の人はお孫さんくらいではないですか、若い人は、私は大学で松原祐善という仏教者にお育てをいただきましたが、ちょうど四十違いました。ですから僕にとつては、なんていうか、おじいさんでした。ですから四十違うというのはそれくらい違うのです、だから先生の前に出ると「馬鹿が・・・」と怒られてばかりでした。きつい先生でしたが、おらかな優しい先生でした。恐ろしい先生でしたが、おじいちゃんでした。最初見たとき、私は若いのですから「この人大丈夫かな」と思った。それくらいおじいちゃんでした。

実際に私の手を取り足を取つて育ててくださったのは寺川俊昭という先生でした。私は寺川先生とはちょうど二十歳違います。二十違いますと、ちょうど親子くらいでしたから、先生には、夜の食事が困るものですから（寺川先生は単身赴任だったので）息子のようになり、毎日、祇園に行きました。祇園といひましても、舞妓さんの

いるところもありますけれども、そういうところではなくて、小料理屋みたいな所に行つて、いつもお酒を飲んで先生と議論をしてました。仏教の話の特にするわけではないのですが、うまく言えないですが、世間話でも仏教の話なのです。そんなふうにして寺川先生にお育てをいただきました。おそらく五百万円以上は寺川先生の金で飲んだと思います。それでこの程度ですから、教育というのは金のかかるものです。

親鸞聖人も法然上人の門下の時に、そんなふうには法然上人と一緒に食事をして、そして毎日生活をしながら、先生の立ち居振る舞いから、それから、ちよつとした返事から、それから、ちよつとした応対の中で、「この方にはかなわん」と思われたのでしょうか。どんな人にもちゃんと平等に接し、どんな人にもいつも丁寧な、そして絶対に自慢せず、しかも卑下もしない。いつも自分らしく堂々としておられる。そんな法然上人を見て「いいなあ」と思われたのではないですか。こういう勉強の場所も大事なのですが、そういうのは日常生活の中で伝わっていくものだと思います。ともかく法然という偉大な仏者に会つたわけです。

#### 法然上人

法然は岡山みまかの美作みまか（現在の岡山県）の出身で、親鸞と四十歳違うということになります。ほぼ平安の末期に生まれたことになります。岡山みまかの豪族の出身で、お父さんが漆間時国という豪族でしたが、近くの敵対する豪族に殺されるのです。その時に幼かった法然を呼んで「私が殺されたからといって相手を恨むな。お前が武士になつてもまた相手を殺すということになると、いつまでたつても戦いは収まらない。だから絶対に恨むな。その代わり出家をして仏教に教えを乞ひ、戦いを超えるような道、絶対に人と人が殺しあわない、そう

「信念とそういう世界を何としてでも開いてほしい」と遺言します。それで法然は出家をしますのです。

十三歳で出家をしたとか、十五歳で出家をしたと言われていますが、当時の慣習としては、比叡山ではだいたい十五歳で出家をします。ですから親鸞聖人は九歳で出家をし青蓮院で得度をしたと言われていますが、九歳で比叡山に上るということは無理です。だから、おそらく九歳で得度をして、青蓮院あたりで見習いの仕事をしながら、早くして十二、三歳、そして十五歳で出家をして授戒をすまます。授戒というのは戒律をいただいて自分の生活の基本にし、僧侶としての生活をする。それが始まりなのです。

だいたい十五歳くらいですが、今の十五歳というのは幼稚園の子供とあんまり変わりません。大学に来て見てもらったらわかりまます。大学生も幼稚園の子供とあんまり変わりません。しかし明治のころを見てごらんさない、三十を越えて亡くなっていくでしょう、それも国家を背負って。西郷なんか四十過ぎで西郷翁です。翁という、もう、じいさんということ。だから皆さんは化石みたいなものです。つまり年を取るのが早かったのです。やはりませていたというか、十歳を越えればいっぱしの大人です。十二、三歳でいっぱしの大人、十五歳になれば国家を背負って、あるいは、自分はどここの分野で命を落とせるかを本気で考えた。昔はそういう状況です。

ですから法然は十五歳で出家をし、勉強をしますが、素晴らしい才能でした。『大蔵経』を五回読んだと言われています。『大蔵経』というの、この壁一面くらいあります、漢文で書かれた経典がずつとあるのです。それを五回読んだと言われています。私だっただら一冊読むのに何年もかかるのではないのでしょうか。

親鸞なんかでも『大蔵経』の校正をしています。校正というのは

分かりますか、日本に伝わった『大蔵経』を見ながら、ここは字が違うということをチェックする、そして若い人に調べさせてなおさせる仕事を鎌倉幕府でやっています。これは『大蔵経』が頭に入っていたということ、とんでもないことです。どんな頭をしていたのでしょうか。

自分が救われる道求めて

法然という人は特に優れた人でした。だが、若いころ父親の死に遭い、そういう遺言に会った。あれは本当に大きかったのではないのでしょうか。自分が本当に救われ、あらゆる人が本当に平等に救われていく仏教。どんなふうにも救われていくのか。それを一般の人たちにどう伝えるのか。学問的な関心で勉強している学者もたくさんいますが、法然は若いころから自分の生き死にをかけて、自分が一体どうしたら救われるのか、そういう形で求道した。自分が救われる道求めて苦労した仏者でした。

ですから比叡山に籍がありますけれども、南都（南都というのはわかりますか、平安仏教、奈良の興福寺、東大寺です）、南都にもたへん素晴らしい学者がいましたから、出かけて行って自分が救われる道を探っています。それから高野山（比叡山があれば一方に高野山があります）、高野山は空海の学場で真言の密教です。そこにも出かけて行って、有名といわれる人に自分が救われる道を探っています。けれども法然自身が「私は若いころから南都にも高野山にも有名な学者、それから有名な仏者、それを訪ねて回った。しかし誰一人として、私のこの体全体が救われる仏教を教えてください。はいなかった」と書かれています。法然は仏教がわかるまでに時間がかかりました。

親鸞聖人が法然に出遇ったのは二十九歳でしょう。二十九歳とい

うとかなり時間がかかっています。二十代、だいたいその頃に分かるのです。

しかし法然上人は分かったのが四十三歳です。だからずいぶん遅かった。頭がよくてもものすごく勉強したせいもあつたかもしれない。しかし、本当のことを言う人に遇えなかったのでしょうか。失礼な話ですが、少し気の利いたようなことを言う人に出会うと「だからそれがどうしたというのか」「私はそんなことは知っている」「私はどうしたら救われるのか」ときつと思つたでしょう。そんなふうにして法然は長い間苦勞した人です。

「悲しきかな、悲しきかな、予が如き愚鈍の身は戒定慧の三学の器者うつものにあらず」と自分で述懐しています。悲しいことに、自分のように愚かな身を持ったものは、比叡山のように戒律を保ち、座禅という修行を積んで、悟りの智慧を開く、戒定慧（これを三学といいますが）の器者うつものではない、と。

わかりますか、皆さん、分かるでしょう、私たちは「愚鈍だ」とは思つていませんが、眠たくなるとすぐに寝る。腹が減つたらすぐに飯を食う。やらなければならぬことは後回して、今、楽しむことばかり追い回す。何かあつたらぶつぶつ文句を言う。そういうことを全部ひつくるめて「愚鈍の身」という。そういう身を持つている。

悲しいことに、私のような愚鈍の身を持ったものは、凡夫の身は、「戒律を保て」と言つても難しい。

ただし、法然は生涯戒律を保ちました。座禅を組んで修行をする。そして断惑証理、迷いを断つて真理を覚る。迷いを断つというのは戒律を保つ、煩惱を捨てていく。修行に励んで悟りを覚つていく。これは聖道門の仏教です。

## 『観経疏』との出会い

法然は三十年間、比叡山で学びましたが、四十歳のころに「私は仏教について知らないことは何もない、しかし、ただ問題が一つある。それは自分が救われていないということだ」と言つて比叡山を下りていきます。

四十歳というともう翁おきなです。じいさんです。もし法然が比叡山にそのままいたら確実に天台座主になつていきます。だから名譽とか地位とか、社会で生きていく私たちの関心で考えると「あの法然が四十歳で比叡山を下りてきた、どういうことだ」とみんなびつくりしたのです。そうですね、あのままおれば必ず天台座主になつていたのですから。それが、そういうものを全部かなぐり捨てて山を下りてきた。そして「自分の救われる道を命がけで探したい」と経堂に入つて『大蔵経』を一から読み直すのです。その時に「『知らないことを知る』とか、『学問的にはどうか』という関心ではなく、『私を救うのは何か』、そういう関心一つで読み直したのだ」と法然は書いています。

その時に、皆さんの聖典（東本願寺聖典）で言う二百七十七ページ、（聖典を求めてくださったそうですね、申し訳ないことですが聖典に慣れてください）親鸞聖人の『教行信証』の中に、法然上人が廻心した、つまり「仏教が分かつた」という時の言葉が収録されています。

終わりから三行目、これは中国の善導大師の『観経疏』という書物の中にある文章です。『観経疏』というのは『観経』の注釈書という意味です。「疏」という字は注釈書という意味です。流れるという字によく似ていますが違います。善導大師の『観経疏』の中の文章に「一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、これを「正定の業」と名づく。かの仏願に願ずるがゆえに」

これが、たくさんの『大蔵経』を一から読み始めて、この文章に当たった時に、あの法然上人が感動して涙を流して、そして浄土教に廻心したという、そういう文章です。この文章を今読みました、感動して涙を流す人がおられたら、どうぞお帰りください。合格です。何のことかわかりませんかでしょう。なんでこんな文章に感動をするのか。

この文章の意味はともかく次のようです。

「一心に南無阿彌陀仏を称えなさい。「行住座臥」、歩いていようと、座つていようと、あるいは寝ていようと、とにかく一心に南無阿彌陀仏の名号を称えなさい。「時節の久近を問わず」、歩こうと寝ようと座ろうと、時節は問わない、いつでも南無阿彌陀仏を称えなさい。そうすると「念々に捨てざればこれを正定の業となす」。南無阿彌陀仏を称えておれば必ず助かります。必ず浄土に往生します。浄土の往生が正しく定まったという業(行業)が南無阿彌陀仏です。だから座つていようと、立つていようと、寝ていようと、とにかくお念仏を称えなさい。なぜなら南無阿彌陀仏の名号は本願に順じているからです」と。

(こういう言葉、皆さんどうですか、眠たくなってきませんか)

法然は生きるか死ぬかで、「自分のようなものは聖道の仏教では助からない、もう自分で修行するとか、努力するとか、そんなものはない、このままで救われる道が欲しい」と刀折れ、矢尽き、「もしこの『大蔵経』を読んで救われなかったらもう死んでもいい、自殺してもいい」と思っていたのでしょうか。

当時は自殺しても一緒なのです。この世で救われなかったら地獄

に落ちます。なかなか立派な考え方ではありませんか、皆さんそう思つて自殺をしないでください。どうせまた今よりも苦しいところに行くよ。なかなか当時の考え方は立派です。だから自殺をするわけにもいかない。生きていくこともできない。

その時に、「ただ念仏を称えなさい、念仏は阿彌陀の本願によつて選ばれた業(行業)なのだから、必ず阿彌陀が救つてくれる」こういう文章に出会つて、感動して、法然は泣いたのです。南無阿彌陀仏によつて救われた。

それ以来、法然は南無阿彌陀仏一つ、そういう仏教に順じていくことになりました。

(難しいでしょう、どういったらいいのか、うまく説明できないね)

#### 『法華経』―出世本懐経

大乘の仏教の中に二つ道がある。一つは、『法華経』を中心にする道。大乘の経典の中に「出世本懐経」というものがあります。出世本懐経というのは「出世して本懐を遂げた」ということではありません。お釈迦様がこの世に出世してきた本懐はなにか、お釈迦様が私たちと同じような姿をもつて世に出てこられたのは何の為か、それを経典の中でお釈迦様が「私はこのために出てきたのです」と宣言している。それを出世本懐経と言います。

一つは『法華経』です。『法華経』というのは一乗、一乗というのは、孫悟空がお釈迦さんの手の平から飛び上がった筋斗雲きんとうんに乗つて、「ここまで来たからお釈迦さんの手の平の上ではないだろう」と思つて下りたら、やはり手のひらの中だった。どんな人もお釈迦さんの悟りの中にある。それを明らかにするのを「一乗」という。

だから皆さんも悟りの中にあるのです。あるのですが、悟りの中

にあつて、悟りを忘れている人、わからない人、それを「凡夫」といい、分かった人を「仏」という。皆さんも本当は悟りの中にあるのです。それを忘れているから何とかして回復させたい、それが基本的な大乘の教えなのです。

ところが、『法華経』だけは、お釈迦様が「私はこの經典で一乗を説くために出てきたのです」と宣言しているのです。ところが、お釈迦様の悟りというのは、言葉を超えたものだから、お釈迦様がどれだけ説明してもわからないのです。

#### 声聞・独覚・菩薩

お釈迦様の一乗という悟りはそのまま説いてもわからないから「凡夫」というのがいるのです。そして凡夫を越えて出家した直弟子に「声聞・独覚」がいる。これは小乗の僧伽の弟子たちです。阿難とか舍利弗とか、經典に出てくるお弟子さんたち、あれはみんな声聞独覚という。「声聞」というのは、お釈迦さんの声を聞いて勉強する人。その中で悟りを覚った人たちもいる。それを「独覚」といいます。これは小乗仏教と言ってお釈迦様の直弟子たちです。僕はお釈迦様ではないが、釈迦だったら皆さんは直弟子、直接勉強しているから、声聞、独覚といえます。この人たちは小乗仏教の人たちです。(ややこしい話です)。

お釈迦様の直弟子はたくさんいたのです。みんな勉強する人たちで、あるいは覚ったという人も実際にいました。ところが周りの市民たちから見ると、どうもお釈迦様と違う、自分のためばかり勉強して、そして自分で覚ったと言っているけれども、その覚った内容を少しも私たちに伝えてくれない。お釈迦様と違うではないか。お釈迦様は見たらわかる、覚ったその日から自分の生涯を周りの人のために捧げたではないか。それを自分のためだけに勉強して、自分

で「覚った」と独りよがりで言っているだけだ、私たちに何の利益もないではないか。そういう非難を受けることになります。

(今の坊さんによく似ていませんか、皆さんの方からはあまり言いにくいかもしれませんが・・・)

僕はよく京都から北陸に話に行っていました。北陸に行くサンダーバードというのはみんな関西から温泉に行く電車なのです。朝からばんばんビールを飲んで、「行くぞー」と言つて大声をあげている。そのうちにおぼちゃんたちは酔っぱらって世間話を始める。時々、坊さんの悪口を言います。じつとして聞いているとその通りです。「坊主の馬鹿どもや、私たちは葬式をしてもらわないといけません。何か何とも言えないけれども、金をとるばかり、そしていつもボランティアだ、なんにもならん」と、ぶつぶつ言っている。

よく似ている。わかりますね。だからこういう声聞独覚というのではなくて、お釈迦様のような菩薩にならないといけない。声聞独覚でなくて、もう少し専門的というと、これ(声聞独覚)は自分のためだけ、これを仏教では自利という。自利のみあつて利他がない。他人を癒すことがない。だから自利と利他を兼ね備えたお釈迦様のようにになりたい、それを大乘仏教では菩薩という。それが目標になります。わかりますね。ですから大乘仏教は、仏教が分かったならばお釈迦様のように生きるようになるのです。それを「菩薩」という言葉で表した。

#### 一乗の法を説くー菩薩の退出

お釈迦様は『法華経』の中で、本当はすべてのものが救われる法、「二乗の法」というものを説きたかったのですが、それはいくら言つても言葉を超えていますからわかりません。だから、これまでたとえとして「声聞と独覚はだめよ、菩薩になんないよ」(これを三乗

といいます。一乗に対して三乗」というふうには、三乗ということをはわかりやすく説いてきた。本当は一乗ということを読きたかったのですが、一乗を直接説いてもわからないから、「本当のことは言っていない」と『法華経』の中で言います。

すると菩薩が「何しに來たのか、いいかげんにしなさい」と言つて怒りました。聞いていた人が、そこからザーと退出していききました。（皆さん、今日は、忙しい中、来てくださったでしょう。いい話をするのではないかと一生懸命聞いてくださつて、四時頃になつて、私が「今日は本当のことは一つも言つていません」と言つたら怒るでしょう。）

お釈迦様が、ある日、突然、「本当は一乗を説きたかつたのだが、分からないだろうから、分かりやすいように、声聞独覺をこえて菩薩になれ、と三乗を説いてきた。ところがこれは方便であつて真実ではない」と言います。そうしたら、（中には「わかつた」といつて感動した人もいたのです）「今まで聞いたのは何だつた」「どうしてこれのか」と言つて、ほとんどの菩薩は帰つてしまうのです。それを増上慢といいます。増上慢というのは思ひ上がつていふこととです、反対を卑下慢という。そしてあとに少しだけ菩薩たちが残ります。

お釈迦様の弟子の中で、いちばん出来がよかつたのは、『阿弥陀経』に出てくる舍利弗です。あの舍利弗が「分からなくてもいいから説いてください、お釈迦様の言葉を聞きたい、お願いします」とたのんでも、お釈迦様は「説いてもわからん」と三度断ります。（仏の顔も三度」と言いますね。お釈迦様はいつも三回です）その時も「説いてもわからない。悟りは人間の考えを超えている。いくら説いてもわからないから説かない」と三度拒否します。四度目にやっと「そこまで言うならば説きましょう、私はこの一乗の法を説くために今日

ここに出てきたのです」と宣言します。

素晴らしい經典でしょう。この『法華経』を中心にする仏道の流れが大乗仏教の流れです。例えば、日本仏教であつたら比叡山がそうです。比叡山は『法華経』中心です。大きな『法華経』を中心にする流れがあります。

そのように『法華経』はお釈迦様自身が「一乗の悟りを直接説くために、私はこの世に出てきたのだ」と宣言します。だから他の大乘經典は『法華経』を助けるためであると考えられます。例えば皆さんが知つている『華嚴経』、『涅槃経』、『般若経』、たくさん經典があります。それらの經典は『法華経』を頂点にして、それを助けるためにある經典だと考えると一番わかりやすいのです。

## 二つの出世本懐経、二つの仏道

ところが不思議なことに、出世本懐経が大乗の經典の中にも一つあるのです。おかしな話でしょう。けれども一つあるのです。それが親鸞聖人が大事にされた、私たちがこれから勉強していく『大経』です。『大無量寿経（仏説無量寿経）』が出世本懐経です。

『大無量寿経』の出世本懐経の文は、これから『教行信証』を読んでいくときに、教の巻に親鸞聖人がほぼそのまま引用していますから、そこにいつて詳しく学びます。ですから、今は概説です。

お釈迦様の出世本懐経が二つあるというのはおかしな話で、どちらかがなかつたらいいのです。二つあるからややこしいのです。ということは大乗仏教の中に仏道が二つある」ということをお釈迦様が教えていることになりました。

一つは『法華経』を中心にする聖道門・自力の仏教と、もう一つは『大無量寿経』を中心とする浄土門、本願他力の仏教、この二つの道があるということをお釈迦様自身が示唆していることになりました。

私たちが分からないから「ややこしい話だ」と言っているものであつて、お釈迦様ご自身が出世本懐経を二つ説いているということは、自力の仏教と他力の仏教、二つの仏教が大乗仏教の中にある、ということを教えていることになります。

法然も親鸞も最初は聖道門です。みんなそうですが、聖道門自力では覚れず苦勞します。それでも悟りを求めてやまない人たちが、やがて南無阿弥陀仏の道に入っていきます。みんなそうなっています。ですから聖道門自力の仏教と、本願を説く他力の仏教と、この二つの仏道の流れがあることが分かります。ただ、どう違うかはたいへん難しいのです。

(眠いでしよう、もうすでに寝ようとしている人がおりますね。皆さんはこれだけたくさんいるからわたしがわからんと思うでしょう、こちらから見たらようわかるのです。目をつぶって聞いているふりをする。そのうちコックリする。なかなかこみ入って難しいかもしれない)

今、申しましたように自力の仏教で苦勞する。この人たちは自力の仏教で苦勞し、どうしても救われないと、刀折れ、矢尽きている。そして、やがて本願の念仏に転向している。これは事実です。

### 偶宗

法然は浄土教を独立させましたけれども、それまで浄土教は「偶宗」といって、「偶宗」というのはわかりますか、聖道門の中にちよつとだけ念仏があつた。どの教えの中にも念仏は流れているのです。例えば韓国に行くと曹溪宗というのがある、これは日本の禅

宗に近いが、曹溪宗の中に念仏を中心に学ぶ人たちもおります。そのように比叡山も『法華経』を中心にする聖道門の学場(学仏道場)ですが、その中で横川というところを中心にして、念仏を学んでいる人たちがたくさんいました。

みなさんは比叡山に行つたことがありますか、そこには、ご存知のように、法華三昧堂と念仏三昧堂と二つの堂があります。それはそうでしょう。『法華経』は出世本懐経、『大経』も出世本懐経だから、『法華経』の修行をする法華三昧堂と、念仏の修行をする念仏三昧堂と、二つの堂が建つていて、その間は廊下で繋がっています。この二つを担い堂にんといいます。

ですから念仏の教えというのは、大きな聖道門の中のある部分にずっと流れていたのです。そもそも聖徳太子が日本に初めて仏教を伝えたのですから、その聖徳太子が念仏を称えていなかったら念仏は伝わっていません。聖徳太子は『維摩経義疏』とか『法華経義疏』とかいう注釈書を書かれたけれども、実際は念仏を称えていた念仏者だったのかもしれない、そんなように、大きな聖道門の流れの中に、少しだけ念仏の教えがある、というのが実情でした。

### 源信僧都

みなさんご存知の源信僧都、この人もたいへん優れた仏者でした。十五歳で紫の衣を着て、比叡山のトップに立ったのです。十五歳ですよ、すばらしいでしょう。(僕は十五歳の時に何をしていたかな)源信は貴族に法事に呼ばれて(当時は法事をするのは貴族だけです。庶民に仏事はありません。庶民が仏事をするようになったのは法然が念仏を広めてからです。それまでは仏事をするのは貴族だけです。だから貴族の家に行つて法事を務めたのでしよう)法事を務めて、素晴らしい反物を貰い、意気揚々としてそれを母親に贈るの



です。

そうしたらお母さんが「こんなものを貰うためにお前を出家させたのではない、この母を救え、本当に仏教が分かったらこの母を救え」と言つてくいきがるのです。(素晴らしいですね。皆さん、それくらいのことを子どもにしてみましたか)それが源信は腹に響いたのです。源信は母親からそんなふうに迫られて、すぐに出世街道から引退するのです。二十歳前に横川に引退し、そして「自分が救われる道は念仏しかない」と言つて『往生要集』を書いたのです。

そんなふうには聖道門の中に念仏宗がずっと伝わってきたけれども、これまでのいきさつからみると、聖道門では、自力では、救われなかつた人たちが、念仏の教えによつて救われていつている。これは事実です。そんなふうな大きな流れがあるということについて知つておいてください。

親鸞聖人の仏教を学ぶときに、親鸞聖人がどういう仏教を教えてくださいましたか、それは大事なことです。浄土真宗というのはどういう仏教なのか、それはものすごく大事なことです、きちつと勉強すると眠たくなるから、皆さんのお顔を見てお話することにしましょう。

ちよつと休憩して、皆さんの顔をみて元気そうだったら、せつかくだから聖道門と浄土門の違いをお話しましょう。ちよつと休憩します。

## 《二席》

先ほど聖典で示した『観経疏』の文章にふれて法然は浄土教に廻心した。「あの文章でなぜ浄土教に廻心したのか」、それを皆さんに解説するのは本当は無理なのです。それくらい難しいけれど、頑張つてやりましょう。

つまり、お話をしてきたように、大乘仏教は聖道門という自力の仏教が中心になつて伝わってきたわけです。ところが、今、言つたように、自力の仏教に敗れた人たちがこの他力の仏教で救われていつたのです。

反対に、皆さん、自力の仏教で悟りを覚つたという人を見たことがありませんか。なんだか、わけのわからん坊さんが字を書いたりしていますか、あれは俗物です。京都に行つたらいくらもいます、彼らは本当に俗物です。私はよく知っています。あんなものは坊さんではないです。これは冗談ではないです。だからそんなふうには、本当の意味で救われた、世間を超えた、という人は浄土教にしかないのです。実際に、法然が浄土教に廻心したのが四十三歳です。

### 大原問答―貞慶との論争

五十四歳の時に、法然は後に天台座主になつた方から大原に呼びだされて「大原問答」という論争がありました。その時に法然は一人で聖道門の人たち百人くらいを相手にして議論をします。百人くらいですけれども、実際はどうも百人くらいの中から代表が出て、そして大原の三千院に高座がありまして、あつちに座り、こつちに座つて対で議論をしたらしい。議論をした記録が今も残っています。

それを見ますと、皆さんもよく知っているように、親鸞聖人は承元の法難で流罪になった。あの承元の法難で流罪になる訴え状を書いた人が興福寺の貞慶という仏者です。この仏者は奈良の興福寺です。ですから、当時から言えば旧仏教です。旧仏教の代表者が明恵と貞慶と二人いたのです。

この貞慶という人と大原の間答で対決します。

そうしたら貞慶が「浄土教なんて死んで浄土に行つて悟りを覚るという話だから、そんなものは仏教ではない。私たちの聖道門は今ここで悟りを覚る。浄土教は仏教ではない」と食つてかかるのです。

ところが法然はさつき言ったように「私は愚鈍の身である、いくら煩惱をなくそうと思つてもなくせません、私のような煩惱をなくせないようなものを救う仏教は南無阿弥陀仏の教えしかないのです」と答える。

それに対して貞慶が「それは違う、聖道門で悟りを覚るという道が立てられている」と食つてかかる。そうしたら法然はさすがです。

「そうですか、それでは聖道門で悟りを覚つたという人を連れてきてください」

(わかりました、悟りを覚つたというならその通りでしょう。もし本当に悟りを覚つたのだしたら、その人を連れきてごらん)というわけです。

そこで貞慶は「ぐ」と詰まった。

外では三百人あまりの人々がこの論戦を徹夜で見ている。「法然の言う通りだ。悟りを覚つた人がどこにいるのだ。法然は俺たちの味方だ」と拍手をした。

そういうことが記録に残っています。

貞慶は、その時痛く傷つけられた。だから恨みに変わった。だから興福寺訴状を書いて法然を流罪にする方向になったのだと思います。そうしたとは書いてはないが、そんなものです。

そのような聖道門仏教と浄土教との違いを、やはり、今日はしゃべりましょう。

わからない人はわからないでいい。わかる人はわかつていい。

### 釈尊をモデルに立てた仏教

あたりまえのことですけれども、大乘仏教が立てられたときにモデルになったのは、何といつてもお釈迦様です。

みなさんもブツダガヤを知っているでしょう、この中にインドに行った人おられますか。ブツダガヤに行くと、お釈迦様が悟りを覚つたところに塔が立っています。その横に金剛法座があります。その近くに尼連禪河（にれんぜんが）という川があります。この尼連禪河でお釈迦様が流された。そこから向こう側を見ると岩山が見えます。そこが前正覚山（ぜんしょうがくさん）と言つて、お釈迦さんが六年間苦行した所です。六年間苦行して、(ガンダーラのお釈迦さんの像がある。骨が出て筋が出て目が引つ込んで、あんなお姿でおりにきたのです)そして川を渡ろうとして流され、スジャータという娘に救われる。そして乳粥（ちちがゆ）を貰つて息を吹き返したのです。(皆さんよくご存知ですね)それからちよつと離れたこの金剛法座の上で、やがてお釈迦様が悟りを覚るということになっていきます。

そうすると、だれでもお釈迦様のように苦勞して修行し、やがて悟りを覚るといふ方向が見えます。だから最初にお釈迦様がモデルになって仏道の段階が立てられていきます。それを釈迦教と言います。これは自力ですから聖道門ともいいません。聖道門というのは聖

人になっていく、聖人というのは菩薩になっていく。凡夫が修行をして、修行の成果によってだんだん菩薩になっていく、立派な菩薩になっていく、それを聖道門と言います。

聖道門の段階が『菩薩瓔珞経』（親鸞聖人の『教行信証』にも引用されています）に、そこに五十二の段階が書かれています。「十信」「十住」「十行」「十回向」「十地」こんなふうには十ずつ、そして「等覚」「妙覚」とありますから、五十二の段階。「妙覚」というのは如来の悟りそのものです。「等覚」というのは如来の悟りと等しい。

『華嚴経』の中に『十地経』というのがあります。十地だけを説いた経典です。

「十地」から菩薩になります。十地の一番最初を初歡喜地という。聞いたことありませんか。こういうのは『教行信証』を勉強していく上で知っておかなくてはいけない。これからだんだん出てきます。ここに到達した人は龍樹と世親です。七高僧の中で龍樹と世親は菩薩と尊敬されています。だからここまで到達していることになりました。だから親鸞聖人は「龍樹菩薩 世親菩薩」と、ちゃんと「菩薩」と言うでしょう。それは初歡喜地の菩薩だからです。七高僧の中で龍樹と世親は初歡喜地の菩薩です。ともかく十地から菩薩です。

### 七地沈空

この菩薩の中の第七番目を「七地沈空」という。聞いたことありませんか。ここまで来たら「空」を覚る。「空」を覚ってしまったと動かなくなる。動きが止まってしまうから二乗と一緒になるのです。自利利他がなくなってしまうのです。救われる皆さんも空だし、救う私も空だ、ということになると、何もしくなくていいという話になる。それだったら仏道にならない。だから菩薩道では、この「七地沈空を

どうやって越えるか」ということがものすごく難しい問題になってきます。

この時に、阿弥陀如来に遇って七地沈空を越えていくのです。阿弥陀というのはすごいのです。皆さんは「阿弥陀さん、阿弥陀さん」と簡単に言っているけれども、阿弥陀さんというのは仏さんの中の仏さんだから、ともかくこの七地沈空を越えていくとき、阿弥陀の本願によって超えていくのです。そのように説かれています。

いずれにしても「十地」から菩薩道、「十回向」まで凡夫、「十住」から「十回向」までは出来のいい凡夫、何事も出来のいいのもいるでしょう、出来の悪いのもいますが、出来の悪い「十信」は外凡夫と言います。凡夫の外にいる、出来の悪い外凡夫。いずれにしても、こんなふうには修行の段階が課せられていて、そしてどンドン上に上がっていく。

あの麻原正晃のばかたれが、修行をしたら、ステータスが上がるとか、上がらない、とか言っていたでしょう、あれはこれをまねをしていたのです。仏教は全部これなのです、浄土教以外は全部これです。比叡山もこういう修行の段階を前提にして修行をしているのです。今、どの段階いるかということをやちゃんと教えられて修行しているのです。

皆さんは、どの辺にいますか。出来の悪い凡夫だから外凡夫あたりにいると思うでしょう。違うのです、もつともつと下です。出家して戒律を保つというのが外凡夫ですから、それもしていない人は外凡夫に入らないのです。こんなふうには、聖道門の修行の段階が立てられていて、これにのつとつて修行をしていくということになります。ここまではわかりますね。

法然はそれを三十五年間やったのです。親鸞もほぼ二十年やったのです。この修行は最終的には「如来（これを「一如」と表わす場合もあるし、「空」とあらわす場合もあるし、「大涅槃」と表わす場合もあります）」を覚る。この悟り（覚り）に向かつて修行をしていくのですが、それは結局、勉強してわかった悟りです。「悟りそのもの」が分かるわけではないのです。「悟り」というのはこんなふうにかかれていて、それを勉強していこうとするのです、そうすると、それは「悟り」と言ってみても人間が考えること（解釈）になっていく。だからこういう道が本当に成り立つのかどうか怪しいのです。そうは思いませんか。

もうちょっとと言うと、いいですか、さつきに話を戻しましょう。お釈迦様が修行をし、骨と皮だけになった。それは事実です。ところがスジャータに乳粥をもらって息を吹き返した。それから一か月くらいして悟りを覚った。私たちの理想主義とか向上的な考え方からすると、修行して苦労した結果、悟りを覚ったと見える。見えるけれども、これ、本当に修行をした結果、悟りを覚ったのだろうか。それとも修行となんの関係もなく悟りを覚ったのだろうか。これはお釈迦さんに聞いてみないとわからないのです。

どうですか、そうですね。そうすると聞くべきお釈迦さんはもういないのです。そうすると本当に自力の聖道門、釈迦教ということが成り立つのかどうか、実に危ういことになってきます。

「救い」が何かわからない人間

私たちは今言ったように「救われたい」と思います。けれど、「救い」とは何であるかわかっていないのです。せいぜい「なんか楽になった方がいい」とか、「なんかいいものが欲しい」とか思うぐらい。

僕みたいなものは車の「ジャガー」が欲しいのです。そんなことくらいしか思いつかない。

「救い」って何ですか、みなさん、どうなりたいのですか、これは難しいです。人間にはわかりません。それは「悟り」が何かわからないのと同じです。結局、我々は、この世にあるものしか目につきませんから、金とか地位とか名誉とか愛とか政治とか、いろんなことを言ってみても、みんな全部この世にあることです。そうするとこの世を超えたお釈迦様の「悟り」とは無関係です。

人間は何にになりたいのか、どうなりたいのか、よくわからない。つまり、生まれてからずっと「人間、がんばらんといかん」と思っ生きてこなかったですか？「こんな私でいいのか」と思わなかった？ほとんどの人は「うん」と言っている。それはつらいでしょう。人間は生まれたときから、どうしてか分からないけれど「がんばらなくては」と思っているのです。

僕は、家の子どもが小さいころ、保育園に置いてから大学に車で行っていました。子どもが二歳半くらいの時かな、「お父さん行ってらっしゃい」と言うから、「行ってくるな」と言ったら、今度は「あーいちゃん、保育園で頑張ってくるし」と言う。「がんばってこい」と応えたのですが、車の中でずっと「あいつ、保育園で何をがんばるのだろう」と考えた。

人間は生まれたときから「がんばる」というわけのわからんものを持っているのです。何というか、人間にはそういう（性）癖がある。

何事につけても「がんばらなくてはいけない」と思い続けて生きてきました。そして、この歳までもがんばって生きています。どうなっているのでしょうか。地位も名誉もそれぞれある、しかも金も持っている。持っているから太っている。地位も名誉も金もみんな

持っている、それでもがんばらなくてはいけない。

「がんばらなくてはいけない」という根性は死ぬまで抜けません。それでどうなるか、それは人間にはわかりません。だから「悟り」と言おうと「救い」と言おうと、人間にはわからないということがあ

る。だから浄土教というのは不思議なものです。聖道門の道は人間が仏の悟りに向かっていく、こういう道です。人間の努力が因になって、仏の悟りという果をうる。そうですね、これはよくわかるでしょう。努力をして立派なものになっていく、努力をして悟りを覚

### 『大経』の救い

「悟り」と言っても人間にはわかりません。だから經典の中には、仏の方、仏の悟りが法蔵菩薩になったのだそうです。「一切衆生を救うために、一切の人にこの悟りを手渡すために、仏がわざわざ法蔵菩薩になった」と説かれているのが『大経』です。

もう一度言います。人間には、何が悟りなのかわからない。それから救いというのわからない。何になりたいのかもわからない。行き当たりばったり生きて、行き当たりたりばつたりにがんばって、行きあたりばつたりに死にます。「救い」が何かわからない。

だから仏様の悟りの方が、「救いとはこういうことですよ」ということを教えるために法蔵菩薩になった。そして言葉を超えた悟りを仏さまの方が言葉にした。それが四十八の本願、そして、その四十八の悟りが実現するために浄土というものを如来の方が建てた。そして「浄土が皆さん方の救いなのだ」ということを仏さまの方が示している。これを信じるか、信じないかは別です。けれどもそう示し

ています。そして、「この浄土に一切衆生が生まれるためには南無阿彌陀仏を称えなさい」と、南無阿彌陀仏にまでなつてくださった。こんなふうに『大経』には説かれている。

わけのわからない話です。「それがどうしたの」「私とどういう関係があるの」「そんな奇特な仏さんがいたの」という話です。普通はそうです。ところが『大経』にはそう説かれています。

聖道門の方が『法華経』だとすると、浄土門の方は『大経』（『大無量寿経』）です。聖道門の方は人間の常識でよくわかる。人間が努力をして仏の悟りに向かう。ところが浄土門は反対に、仏の方が、仏の悟りがわざわざ法蔵菩薩になつて、そして南無阿彌陀仏として私たちのところに来てくださる、という。これは僕が勝手に言っているわけではありません。親鸞がそう言っているのです。

皆さん、聖典（東本願寺）を持つておられるので、『唯信鈔文意』の54ページ最初から五行目を見てください

「法身は、いろもなし、かたちもましまさず、しかれば ころも およばれず。ことばもたえたり」

「法身」というのは仏さんの悟りのことです。その悟りというのは「いろもなし、かたちもなし」だから、

（私たちの）ころも及ばず、言葉もたえたり。この一如より、（この悟りより）かたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのりたまいて、不可思議の大誓願を起こしてあらわれたもう御かたちをば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり」と書かれています。

そうすると、僕が、今、言ったことと同じことを言っているでしょう。

一如より、言葉も心も絶えた仏さんの悟りの方から、わざわざ一切衆生を救うために（方便として）法蔵菩薩という形をとってあらわれて、その法蔵菩薩が（私たちはよくわからない）不可思議な大誓願・本願を起こして、その本願によつて実現した浄土に、（一切の救いは浄土だから）一切の人を招き入れるために尽十方無碍光如来、南無阿弥陀仏にまでなつてくださった。

ここまではいいですね、僕が言つた通りでしょう。

だから、こんなことを言う浄土教は、そのことを「信じられるか、信じられないか」だけです。信じられるためにはたつた一つだけ条件がある。

それは、人は「人に負けたくない」という根性を持っています、これは共通ですから、皆あります。そして、それが死ぬまで抜けません。皆さんは、社会でそれなりに頑張ってきた、いっぱい人生を頑張ってきたと思つている。僕も皆さんも、なかなか「凡夫」だとか、「自力無効」だとかは思えない。だから、こんなこと（『大経』に書かれてあること）がお話にしか聞こえないのです。

### 六角堂の夢告―行者宿報設女犯

今までお話をしてきたように、親鸞も聖道門で苦勞して、二十九歳の時に比叡山から下りて来たでしょう。そして六角堂に籠つたでしょう。あの時は、多分、今でいうと、出家の僧侶をあきらめた、聖道門をあきらめたのだと思う。聖道門をあきらめたら普通の俗人に戻るしかないのです、だが、俗人に戻つてしまつたら元の木阿弥です。二十年、何で苦勞したのか訳がわからなくなる。だから「俗人に戻つても、俗人のままで救われる道はないか」ということを求めて

いたのが六角堂であつたのでしょう。その時に夢を見たという。

聖徳太子が夢に出て「あなたが男として女犯、（これは性欲ということではありません。それは戒を破ること、出家をやめるということです。俗人に戻るとのことです）結婚生活をしたというのであつたら、私が玉のような女になつてあなたに仕えましょう」と言つた。

「玉のような女」というのは何かわかりますか？、「まるまる太つた女」、そんなのとは違います。「非の打ちどころのない奥さんになつてあなたを一生支えます、そうして命が終わるときに必ずあなたを浄土に迎えとります」というのです。

その時に、「この浄土教だけが俗人としても救われる道だ」、出家の自力では救われなかつたけれども、俗人に帰つたときに俗人を救うのは浄土教しかない、そして、今、浄土教を説いているのは法然しかいない、と思つた。だからその夢を見て、明け方、法然のところに向つて。

「法然のところに行こうかどうしようか」と悩んでいた時、それは親鸞が窮地にあつた時です。聖道門に絶望している。もし人間の力で覚つたとしても、それが人間の努力の結果であつたとしたら、それは悟りにはならない。いくら努力して頑張つたとしても、それが人間の力で求めたものであつたら、それは悟りになりません。そうしたら、どうしたらいいのか。もうどうしたらいいかわからない、親鸞はそんな状況になつていた。

その時に、「仏さんの悟りの方から、本願の教えになり、四十八の本願を立て、その本願を実現して浄土を建立した」、そういう浄土教という仏教を法然上人から聞く。

地獄をつくるのは私

みなさん『阿弥陀経』という経典があるでしょう。法事の時に「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」と住職が読むでしょう。あれが浄土の一番大切なはたらきです。浄土の一番の特徴です。青い色は青い光を放ち、黄い色は黄い光を放つ。この世は人と比べて勝つか負けるかしかない。そしていろんな条件を付けて、自分が優れているとか、優れていないとかで悩んでいる。けれども浄土はそのままがいい、比べる必要がないのです。「比べる」という分別が破られた世界が「浄土」です。

ちよつと本願に戻りましょう。

第一の本願には「たとえ私が阿弥陀如来になつたとしても、その世界に地獄・餓鬼・畜生があつたら、私は阿弥陀にならない」と誓われています。

「それがどうした、お前の勝手にしなさい」ということもあろうが、よく考えてみたら、阿弥陀の浄土に地獄餓鬼畜生があつたらそれは浄土でない。そんなことはわかつている。皆さんを救うために本願を建てたのですからね。阿弥陀の浄土には地獄餓鬼畜生はありません。あそこで地獄餓鬼畜生を取り上げているのは「地獄餓鬼畜生を作っているのはあなたたちですよ」ということを私たちに教えているのです。

私たちが、自分に都合の悪いことが起こつて、「くそ馬鹿野郎」と思う時には、必ず「人が悪い」と思う。私は若いころ本当に死んでしまおうと思つたことがあります。その時には「親父が悪い」と思っていました。人間は絶対にそうなります。人間の目は外を向いていますから、自分が受け止められないようなことが起こると、必ず人を非難します。あるいは自己保身、自分を守るために嘘をつきます。

この間からの「桜の会」を見たらすぐわかる。「うん」と言わない権力者は嘘ばかりついている。馬鹿なことを言う、そんなことは普通の子供でも分かることです。あれは全部自己保身です。そして「人が悪い」と非難する。ところが仏さんはちゃんと「地獄を作っているのはあなたです」と言っている。「そんなバカなことがあるか」と思ふかもしれないが、これからわかります。仏さんの言うことですから。僕が言うのではない、仏さんが言っているのです。

皆さんは、今は元氣だけど、もうすぐヨロヨロになるよ。前はいろんな所に行つて話を聞いていたが、もうすぐ動けなくなる。そして寝たきりになつて、出来の悪い嫁さんにどうしても下の世話までしてもらわなくてはならなくなるよ。そしてその時に……それだけは言わない。そして地獄になる。

ちゃんと本願は最初から「苦」と言っている。第一願から「苦」と。五劫の昔から仏さんは見抜いているのです。人間は何か困つたら、人のせいにするか、自己保身をするか、責任逃れをするか、それにしかならない。それを「地獄だ」と仏さんはちゃんと教えているのです。

でも、これは人間が逆立ちしてもわからない。「顛倒」という言葉があるでしょう。政府の人たちは東大とか京大とかを出ている人ばかりでしょう、頭のいい人ばかりです。でも東大を出ても京大を出ても絶対に分からない、人間が分からないことを仏さんが見抜いている。

その仏さんの智慧、光明無量、南無阿弥陀仏に触れる。「南無阿弥陀仏」と言つてもただの南無阿弥陀仏ではない、ちゃんと本願が詰まつた南無阿弥陀仏。本願の教え、四十八願の教え全部が私たちの

本性を見抜いている。最初の本願から「地獄はあんたが作る」、親鸞はそれが胸に突き刺さったのです。そこに逆立ちしてもわからない仏さんの働きがある。

その時に親鸞は初めて頭が下がった。仏さんえらい、阿弥陀さんえらい、と。その時に初めて、本願の方、悟りの方から説きだされて、一生懸命生きてきたことが、みんな壊れてしまつて、どうしていいかわからなくなつた人たちが、「そうだ仏さんの智慧が輝いている」と初めて気づくのです。そして仏さんになるのではなく、初めて凡夫に帰る。聖道門の方は仏さんになるのです。浄土の方は凡夫に帰つて本願に帰依するのです。

#### 本願—いのちの叫び声

人間は生まれたときから、何か「立派なものになりたい」と思っている、それはいつたいなんなのだろうか。

人間の中で一生変わらない心なんてない。皆さんもないでしょう。私はずいぶんたくさんの結婚式に参加してきましたが、あの時に言つたらいけないのは「あなたをしあわせにします」です。たしかにその時はそう思っているでしょう。でもその思いは状況が変わるとすぐに変わるのです、一生変わらない心なんてないのです。

ところが、今、言つたような「立派になろう」、「頑張ろう」という根性だけが変わらないのです。よろよろになつても、ゲートボールをすると「勝とう」とする。それです。

「本願」というのはどこかにあるのではないのです。命の方から、皆さんの命の深いところから「いつまで、そっち（穢土）で我を張つて偉そうにしているのか。苦しいだろう、わが名を称えて早く我が国（浄土）に帰つてこい」と呼びかけている。「その声に目覚めな

い」と言っている。それがなかなかわからない。

『大経』で説かれている「本願」というのは、実は、私たちの自我よりもつと深い命のところから呼びかけている呼び声です。それに目覚めて、浄土の教えに頭を下げる。そして凡夫になりきる。凡夫になりきつたときに初めて、本願を生きるものになるのです。

そうなつたときに、ボーとしても必ず仏になる。これは確実です、それは本願に一致しているからです。本願は仏の方から来ているから、必ず仏になる。聖道門は仏を理想にして仏を求める道ですが、浄土教は因の凡夫に帰る道です。その凡夫に帰らせるために本願の教えが説かれているのです。本願はあなた方一人一人の本當の命からの叫び声です。

私をずっと突き動かしていたのは本願だ、ということがわかるときが必ず来る。その時、初めて自力で頑張つてきたことが生きてくる。自力の頑張りがなかつたら浄土教もないのです。自力は方便です。信心の世界を知らせて、私たちの命の底からの本當の呼び声に目覚めさせていくような道に立たせるために聖道門の教えはあつたのです。「聖道門の方が本道（正統）だ」と聖道門の人達は言うのですが、聖道門は方便で浄土門が本道です。法然も親鸞もそういう念仏の教えに生きたのです。

法然は、刀折れ矢尽きて、どうしたらいいかわからん、ボロボロになつた時に、

「寝ておろうと座つておろうと、時節の久近を問わず、念仏を称えなさい、念仏は必ずあなたを仏にする。なぜなら本願によつて建てられて南無阿弥陀仏であるから」

そういう言葉に出会つた。法然はそれに感動して浄土の信奉者になつていったのです。



## 救い―自体満足

そう思うと、みなさん、私も含めて、私たちはしあわせなのとちがいますか。しあわせなうちは幸せと喜んでいなさい、そのうちに思い通りにならない最大の問題が起こってくるからね。それは「死ぬ」ということです。人間の死亡率は百パーセントです。人間は確実に死にます。その時に分かります。その時、初めて自分の命と向き合うからです。その時に命が何を言っているかわかる。その時にわかる命からの呼び声を、「凡夫に帰って、比べる必要のないものになりなさい」と、本願としてちゃんと説いてくださっている。

「救い」というのは自体満足です。「それ自体で十分だ」と言えるものになることです。「人として生まれてきてよかった」、また「できは悪いけれどもわたしがわたしでよかった」と自分の人生に自分で手を合わせていけたら、それが浄土の教えの世界です。

年が四十歳違う私の先生はガンで亡くなりました。ガンと分かった時にはまだステージ三くらいでした。私たちは「手術をしてください」と頼んだけれども、先生は「もう十分です、歩けるうちに帰ります」と言って、さっさと歩いて帰られた。「今日から、点滴も薬もありません」と言って、ほんとに点滴も薬もしませんでした。そうしたら一ヶ月で寝たきりになりました。骨と皮だけになりました。末期がんは痛みがすごいのです。痛みの中で「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」と言われる。私たちは見ているのもつらいので、「先生、痛み止めだけでもお願いします、痛み止めは薬ではないからいいでしょう」と言っても、

「いや、痛いのも私のいただいたものです。生きることにも仏さまにいただいた命ですけれども、死んでいくことも仏様から頂いたものです。どちらも南無阿彌陀仏の中にあります。無量光、無量寿、

どちらも仏さんからいただいたものです、この世に生まれてきて私が一番うれしかったのは親鸞聖人の教えに出会ったことです。私のようなこんなものでも、信心がいただけるまで育てていただきました。どうか南無阿彌陀仏の教えを若い人たちに少しでも伝えてください。」と言って亡くなられて行かれました。

まあ見事でした。私がお話しをすると、「そんな人がいるのか」と思うかもしれませんが、実際に見てごらんください。私は涙が出て涙が出て、この人は仏さんの命を大切に生かした人だと思えました。

わかっていただけますか、釈迦教と弥陀教、仮と真実、『法華経』と『大経』、このように二つの道がある。しかし「こちら（『大経』）が本道だ」と親鸞聖人、法然上人は言うのです。今日は法然上人のお話をしようとして、浄土教というものはどういうことか、ということとを解説しました。

先月はボーツと話をしました。皆さん法話を聞いていると、ボーツとわかる。しかし、このように頭でちゃんと理解していくと自信になっていきます。何が大事かということが分かってきます。ちやうど時間となりました、

## 《質疑の時間》

(田畑)：先生お疲れと思えますが三十分ほど質問の時間をお願いします。四時半まで時間を予定しています。質問したい方はたくさんいらつしやると思います。皆さんに聞こえるように、マイクを渡してから言っていたきたいと思つています。

どうしても質問がないときは、私の先生はこうおつしやつていました「教えの内容と自分の日常生活のギャップはどうしたかということを考えてください」と。「先生がおつしやつた通り日常生活が送れているかどうか、そのギャップを質問したらいいですよ」とおつしやつていました。

言葉の意味等もあると思えますから、それでは質問の方は手を挙げてどうぞ

(質問者1) 最初の方で、一乗と三乗のところ、三乗は方便であつて、ほとんどの菩薩は去つて行つたというところで、舍利弗がお釈迦様に三度乞うところがあつたとおつしやつたのですが、それは何というお経に書いてあるのですか。

(先生)：『法華経』です。『法華経』は一乗と三乗ということを中心に説いています。皆さん「火宅、三車の譬え」というのを知っていますか。

檀一雄という人が『火宅の家』という本を書いたでしょう、彼は教養のある人だから『法華経』を十分に知っていた。大きな庄屋の家があつて、火事になつて燃え始めた。その中で子供が遊んでいるのです。それは多分ぼくらです。本当は火宅の中にいるのに、毎日酒を飲んで、言いたいことを言つて、そわそわして、なんぼ言つても仏教

を聞こうという気ならない。それが火が燃えた家の中にいるという譬えです。

それが「出てこい出て来い」といくら言つても出て来ない。よく見たら、なんかプラモデルで遊んでいる。牛のおもちやと、鹿のおもちやと、そして羊のおもちや、三つのおもちやで遊んでいる。遊んでいる子供に(わからない凡夫)「こつちに出て来い」と言つても、出て来ないからお釈迦さんが、「お前たち、そんな小さな古びたプラモデルで遊んでいるが、こつちに来てみなさい」と、ものすごく大きな真つ白な牛のプラモデルを見せるのです。そしたら、それにひかれて出て来るのです。

だから三乗というのは「方便」で、お釈迦さんの一乗の大きな牛が「真実だ」と言うので、『法華経』は一乗と三乗ということがテーマになっています。真実と方便と言つてもいいし、一乗と三乗ということがテーマになっています。『法華経』という経典は、そういうのが火宅の中で遊んでいてわかる。しかし「一乗は言つてもわからないから言わん」と言つたら、舍利弗が「お願いだから説いてくれ」と三回言つて、三回目に「そこまで言うなら説きましょう」と言つて説き始められるのが『法華経』の悟りです。

だから、聖道門の人たちが、『法華経』が大事だというのはわかります。言つていいかどうかわかりませんが、事実だから申し上げます。

私が中学校一年生くらいだったかな、その頃、創価学会がはやつて、創価学会の青年部の若い人たちが十人くらい押しかけて来て、(うちは小さい寺ですから)私の父親をつるし上げたことがあります。「お前のように、『大経』みたいなものを勉強していたら、そんなものは地獄に落ちるぞ、『法華経』にちゃんと書いてある」と言つた。

僕は怖かったので二階に隠れていました。父親はもつとかつこよく言えばいいのに、「私のような凡夫にはこの本願の教えしかないのです。あなたたちは優れた人たちですから、それなら『法華経』の教えを信じてゆけばいいでしょう、けれど私は『法華経』を勉強する力がないので念仏しかないので」ということをくだくだと言うのです。私は「もう少しカパツと言つて」と思っていたのですが、その時、母親が（女性はたいしたものですよ）、母親が「あなたたちなんですか、とても仏教者とは思えない。やくぎですか。仏教者なら仏教者らしくきちんとやりなさい」と言ったら、ワーワーと脅していたのがシュンとなりました。そして帰って行きました。その時に戦いになつていたのは『法華経』と『大経』です。そんなことがありました。

だから『法華経』は超エリートに説いた教えです。だつて菩薩たちも出て行つたのです。舍利弗は超エリートです。超エリートに説いた教えが『法華経』です。それに対して後に残つた一番出来の悪い阿難に説いたのが『大経』です。そこに『法華経』と『大経』の違いがあります。これは、これから『教行信証』の教の巻などを読んでいくとよくわかります。

その時に阿難がどんなふうに感動したかよくわかります。それはその時にお話ししましょう。今言つたように『法華経』は超エリートのために説かれた経典です。阿難というできない悪い人に説かれたのが『大経』です。ところが、そこまで言わなくてもいいのですが、「超エリートであつても最後には本願の教えでしか救われませんよ」と教えるのが『阿弥陀経』です。だから『阿弥陀経』は「舍利弗よ、舍利弗よ」と何度も繰り返すのです。舍利弗は一番すぐれた人です。だから浄土教というのは、一番すぐれた人と一番出来の悪い人、それに説いている。だけど、どっちも本願が分からないと仏教が分からないということをお話している。

この人たちは「七地沈空」を越えるときに、阿弥陀如来に遇わないと救われないのです。だから聖道門も浄土門も本願です。皆さん一人ひとりの「命からの促し」と考えて下さい。そういう「本願」というものによつて仏教を聞いてください。これ（本願）が説かれているのが『大経』です。

『大経』は法滅といつて、「ほかの経典が全部なくなつても『大経』だけは残る」と説かれている。なぜかわかりますか。人間が一人いたらわかるからです。『大経』の中に仏教が分かる、今生のきつい「自我と自力」と、それを超えた「命、仏教の悟り」と、一人の人間の中で分かるように説いてあるのが『大経』です。人が一人でも生きていたら『大経』は残ります。だから『大経』は末法になつても残りま

す」とお釈迦様は説いているのです。

（質問者2）「声聞・独覚」と言われたのですが、私のことを姉さんはいいつも縁覚と言われましたが、それはどういうことですか。

（先生）「縁覚」というのは「独覚」と一緒で、独りよがりだと言われています。独覚という場合もあるし、辟支仏びやくしぶつということもあるし、縁覚という時もある。それはひとりよがりということですよ。「わかつた、わかつた」と一人で喜んでいますが、私にはわかつたと思えない、そう思われているのかもしれない。

（質問者3）先回のお話で「宗教心というは本當に宗教的にちゃんと着地をしないと宗教的な形をとるとは限らない」というお話があつたのですが、ここところが私にわからなかつたのでご説明をお願いします。

(先生) 大乘仏教というのは、「悟り」と私たちの「迷い」の人生とを分けたいのです。だから生死即涅槃と言うでしょう。「生死」というのは迷いの人生、それが、即「悟り」になるのです。こういう訳のわからんことを言うのです。

それは迷いの人生の中で、さつきから言っていることからしますと「本願」にしましょうか。人間は他の動物と違って、自我ができて、言葉が出来て、「考える」ということができる。ところが「命」というのは「考える」ことを超える、ここはわかりますね。もし「考え」が思い通りになるのなら、お互いにもつと何とかなったでしょう。しようがないのです。だから「命」と申しましょうか、「本願」というものが自我を通つて出て来ると、宗教心とは違ったものになります。

例えば、「人より勝ちたい」とかは、それはよく考えていくと「自由になりたい」ということかもしれない。「負けたいかん、頑張つて金持ちになる」、それはよく考えたら「自由になりたい」ということかも知れない。それが人間には分からない。

まだ、あるよ。

例えば、皆さんは夫婦喧嘩をしたことはないかもしれないが、「夫婦喧嘩は犬も食わん」というでしょ。関係が深くなると喧嘩が激しくなる。他人だったら無視していてもいいが、ずっと一緒に生きてきた人なら、喧嘩が激しくなる。それは、よく考えたら「一つの命を生きたい」とか、「わかりあいたい」ということが根にあるからです。だけど、自我を通つて出て来ると、「馬鹿野郎、思い通りにならないやつだ」となるのです。

まだあります。

令和の最後に宝くじを買おうと相談をしていた。買うと「一億当たったらどうしよう」と思つて、朝まで考えて寝られないのです。

買うものが八億までなったことがある。それで私は頭がおかしいのではないかと思つてやめたのです。

欲というのはいくらでも欲しくなる。いくらでも欲しくなるということは無限に欲しくなる。それが無限なるものに遇えば、金は一銭もいらぬかもしれない。無限を求めている心だからです。ところがそれが分からない。

そのように、本願というものが、自我をくぐつて出てきたときには、この娑婆のものに変わるのです。

そして人間をよく見てごらん、平和のために人を殺している。僕は最近、袖月裕子という小説家が好きで読んでいます、袖月というのは四十何歳の女性です。変わっています、やくざの映画全部持っているというのです。変わっています。あの人は「孤老の死」というのを書いていますが、読んでごらん面白いから。やくざの映画が一番わかりやすい、平和のために殺す、それが人間という。平和と自由と平等を求める心が出て来ると殺すのです。いうことをきかん奴を。

というふうには、宗教心というものは宗教的な形をとるとは限らない。さつき言ったように本当に本願の教えが分かると頭が下がったときに、初めて、全部が本願の促しで生きていたということが分かる。そういう意味で言いました。

今日言ったように、本願が本当にわかつて頭を下げた、それを「仏」という、本願が分からないで狂っている、それを「凡夫」という。これは紙一重です、根は一緒、根が一緒だから翻るといふことがある。もし別々だったら翻るといふことはない。大乘は根が一緒です。悟りはみな一緒なのです。ところが、それが、今言った人間的な娑婆に出てきたときに、もう本願でなくなっている。そんなふうな意味で言いました。

(質問者4) 法然上人と貞慶という人の問答があつて、そして後に法然上人は流されるといわれた。その時の興福寺訴状というのは、それなりのしつかりしたものであつて、それで法然上人は流されたという話を聞いたのですが、その貞慶という人は、法然上人と問答をしたりしたが、法然上人の教えの方には属さないまま、どんなふうに変つたのかなと思つています。

(先生) むしろ恨みに變つたのです。かならずそうなります。お釈迦様に提婆があつたように、キリストにユダがいたように、必ず本物のいるところには殺そうとするものが出てきます。必ずそうなります。本物でない者は、本物がいたら殺したくなる。だから、残念ながら、たまたまそうなつた。ご縁の中でなつたとしか言いようがない。残念ながらそうなつた、それは立場の違いもあるかもしれない。

立場とか、その人が置かれている状況とか、いろんな縁があつて、浄土教に帰依する場合もあれば、例えば君が言うように、反対の人もいました。山伏弁円、これは若い親鸞が本物ということを知り、彼は山伏としての立場があるから許せない。そして親鸞に向かつていく、そして刀を抜いて切りかろうとする。けれども親鸞は逃げない、それにびつくりしたのです。逃げてくれたらまだ自分の顔がたつ。逃げないから、しようがないから刀を捨てた。そして帰依した。

反対の場合もあります。だけどいずれにしても、貞慶とか明恵とかいうのは自力聖道門の立場を貫いたのです。そういう意味では、彼は彼なりに人生を全うしたのかもしれない。けれどもそういうふうになつていきますね、ご縁としか言いようがないかな。

だから、君にしても僕にしても、「殺したい」という人がいないのは、偽物だからです。

文責は編集者の田畑正久にあります。